



朝鮮半島の地誌を学ぶ

中央大学附属中学校・高等学校 松下 直樹

今日、インターネットの掲示板には、不特定多数の「ネット右翼」による誹謗中傷があふれ、在日外国人への「ヘイトスピーチ」に関する記事を新聞等で目にする機会も増えた。筆者は卒業論文で韓国系キリスト教会のもつ多面的な機能を考察して以降、新宿区の大久保コアタウンに定期的に足を運んでいる（松下、2010）。これまで、大久保通りや職安通り、新宿区立大久保小学校界隈で、韓国人に対する「ヘイトスピーチ」を目にしたことがあるが、あまりのできごと言葉に失った。

グローバル化が進展する世界にあって、日本社会でこうしたエスニック・コンフリクトが頻発しているなかで、異なる価値観をもつ者どうしが、相互に理解し共生する社会を実現するためには、「知的営為」を欠かすことはできない（内藤・岡野編、2013）。生徒が差別意識や偏見を抱くことなく、世界の国や地域について理解を深めるうえで、地理教育、なかでも地誌学習の果たすべき役割は大きい。

ウォーミングアップ！

「●自然環境」の設問1（1）では、地形の位置や名称を確認する前に、まず地図帳を用いながら、朝鮮半島の地形の全体像を把握させる。この作業は、地形の名称を覚えることのみで終始させないためにも重要な過程である。

雨温図を選択する設問1（2）では、設問1（3）（4）をヒントに考察させる。まず、暖流である対馬海流の影響を年中受けるチェジュは、冬季でも温暖であるため、雨温図アと判断する。次に、季節風の影響を考慮すると、冬季は北西の季節風の影響で、ソウル、ピョンヤンとも寒さがきびしいことが推測される。なかでも、ピョンヤンは大陸性の亜寒帯気候であり、気温の年較差が大きいことから、雨温図イと判断する。一方のソウルは、南東の季節風の影響で夏季に温暖湿潤となることから、雨温図ウと判断する。

「●伝統的な生活と文化」の設問2（1）（2）では、朝鮮半島の風土と深く結びついた伝統的な生活と文化について考察させる。韓国を代表する食文化の一つで、多くの生徒が一度は口にすることがあるだろうキムチを例に、朝鮮半島の気候の特徴を連想させるとよい。冬場の

保存食として秋につけ込むという慣習や、身体の芯まで温まる唐辛子の辛さなどがヒントになるはずである。これらのヒントにあわせて、オンドルという床暖房の備わった住居、凍結したハン川の写真（『高等学校 新地理A』p.77）を紹介しながら、朝鮮半島は、冬の寒さがたいへんきびしい気候であるという点を導き出したい。

ステップアップ！

「●韓国と北朝鮮」の設問4では、設問4（1）で1950年に勃発した朝鮮戦争について概観させうえて、図1の作業を通して、1953年に停戦協定の結ばれたパンムンジョムと、北緯38度付近に設けられた停戦ラインの位置を確認させる。

「●南北で異なる農業」の設問5では、設問5（1）で着色した図3と、設問5（2）の図4を照らし合わせながら、韓国と北朝鮮の農産物の作付面積を比較し、南北で異なる農業の特徴を概観させる。設問5（3）では、ウォーミングアップ！と設問5（1）（2）で学習したことをふまえ、北朝鮮は、山がちで大陸性の亜寒帯気候が広がるため稲作には適さず、畑作中心で寒さに強いとうもろこしや大豆、じゃがいもが栽培されているのに対して、温暖湿潤な気候の韓国は、耕地面積の半分以上で米が栽培されていることをまとめさせたい。

「●韓国の農業・農村の変化と課題」の設問6では、1970年代に韓国は、セマウル運動とよばれる開発政策により、農家の生活改善ならびに農地や道路の整備がなされ、農村の近代化や農産物の増産に成功したことを理解させる。韓国の農業は、セマウル運動によって飛躍的に発展を遂げたのは確かだが、図5から、韓国の農村では農業人口の流出と、それに伴う過度の高齢化や過疎化といった問題が深刻であることにも気づかせたい。韓国における農業人口の向都離村の背景として、都市と農村の間に依然として大きな所得格差が存在することや、若年層が農業の将来に希望をもてないことなどが考えられる（石坂・館野編、2000）。

「●韓国の農産物輸出」の設問7では、韓国の農産物輸出が急成長していることを確認したい。韓国は農業・農村に課題を抱えながらも、近年、パプリカやトマト、なすといった野菜や、菊などの切り花の輸出用農産物の

栽培に力を入れていることを補足するとよい。ここでは、これらの輸出用農産物のなかでも、ほとんどが日本向けに栽培されているパプリカについて言及したい。

プサンから車で約1時間、チャンウォン市の輸出品生産団地に、パプリカを栽培するガラス温室群が広がる。ガラス温室内の温度や湿度、光合成を促進する二酸化炭素濃度などは、すべてコンピュータで管理され、施設内の環境やパプリカの生育状況のデータの蓄積と分析がなされるほか、肥料や水やりなどはすべて自動で行われる。こうした一連のシステムは、世界第2位の農産物輸出大国オランダから輸入したものである。韓国が農産物の輸出力強化に乗り出したのは、1990年代に入ってからで、各国との自由貿易協定（FTA）交渉が本格化した2000年代半ば以降に、国策によって農地の集約化が進められた。その結果、韓国の農産物輸出は急成長を遂げているのである（朝日新聞2013年5月24日、週刊ダイヤモンド2013年4月13日号）。

ジャンプアップ！

「●工業」の設問8では、朝鮮半島における工業立地の特性とその要因を考察させる。まず、設問8（1）の図7の作業を通して、朝鮮半島のほとんどの工業地域が沿岸部に位置することに気づかせたい。次に設問8（2）で、韓国政府は、国土面積や人口規模が小さいため、国内の需要だけでは経済発展に限界があると判断し、外国資本を導入して輸出に重点をおく経済開発、つまり、輸出志向型の工業化を図ってきたことを説明したい。

「●漢江の奇跡」の設問9では、図8から1960年と2010年の韓国の輸出品の変化を把握させる。具体的には、1960年当初は食料品や鉱産物などの一次産品と、繊維製品などの軽工業品の比率が高かったものの、1960年代後半から輸出志向型の工業化が本格化するなか、自動車や船舶へと重心が移り、1980年代以降は、半導体や電子機器、家電製品も有力な輸出品となっていることに気づかせたい。

「●世界に広がる韓国製品」の設問10（1）では表1から、現在の韓国の経済成長を牽引する財閥について概観させる。なかでも、四大財閥とよばれるサムスン、ヒュンダイ（現代）、SK、LGは、売上高だけで韓国のGDPの5割強を占めるなど、経済への影響力が絶大である。

設問10（2）では、着色した図9から、サムスンやLGが、電気・電子機器産業における製品別の世界シェア上位を占めていることに気づかせたい。急成長を遂げるサムスンについて言及したい。「ギャラクシー」

に代表されるように、好調なスマートフォンで実績の伸ばしたサムスは、今やIT企業として、米アップル社を抜き、3年連続で世界ナンバーワンとなった。サムスンの大躍進を支えているのは「リバース・エンジニアリング」という徹底した商法にある。「リバース・エンジニアリング」とは、競合企業・製品を解析し、すぐれた部分を積極的に自社・製品に取り入れてゆくものである。こうした商法を徹底しながら、かつて手本としていた競合企業に代わって、次々に世界1位の座におどりである。これまでサムスは、他社の背中を追って成長してきたわけであるが、今度は自らが先頭に立って新領域を切り開いてゆく立場となった。今後のサムスの動向にますます注目が集まっている（週刊ダイヤモンド2013年11月16日号）。

設問10（3）では、図10から、韓国は造船竣工量世界一であること、自動車産業についても世界有数の生産台数を誇ることを把握させたい。韓国の自動車産業を牽引するヒュンダイ自動車について言及したい。ヒュンダイ自動車は、10数年前まで、トヨタの生産方式やホンダのブランド戦略を学びながら実践することを成長戦略の柱としてきた。ところが2000年ごろからヒュンダイ自動車は、品質、生産、ブランド、デザインなどに独自色を出し始め、生産量世界5位にまでのぼりつめた。ヒュンダイ自動車にとって、日本の自動車会社はかつての模倣の対象からライバルへと変わったのである（朝日新聞2013年6月7日）。

現在、先端技術を用いた電気・電子機器や自動車を中心に、韓国製品は世界中でシェアを伸ばしつづけている。例えば、東南アジア最大の新興国インドネシアの自動車事情に目を向けると、ヒュンダイ自動車の2010年から2012年にかけての自動車販売台数の伸び率は、94.5%と他の外国製をおさえ好成績を残している（朝日新聞2013年11月20日）。韓国の財閥の影響力は、日増しに大きくなりながら、国内にとどまることなく、世界へと広がりを見せているのである。

参考文献

- ・石坂浩一・館野哲編『現代韓国を知るための55章』2000 明石書店
- ・内藤正典・岡野八代編『グローバル・ジャスティス—新たな正義論への招待—』2013 ミネルヴァ書房
- ・松下直樹「外国人集住地区におけるエスニック共同施設のブリッジ機能—新宿区大久保地区の韓国系教会を事例として—」2010 日本地理教育学会第60回大会・富士学会第8回研究発表大会発表要旨集p.48